

2012 全国高校選抜テニス大会視察を通して

平成 25 年 4 月 4 日

北海道函館西高等学校 菅野清香

今回の「全国選抜高校テニス大会」において、私は、視察の目的として「生徒が大会で最大限の力を発揮するために、部活動顧問にできること」という視点のもとに参加した。本大会には 46 都道府県より男女各 48 チームが出場。各支部大会予選、都道府県大会予選を勝ち抜き今日この場に出場することができている。本大会に対する臨み方が如何なるものか、本大会で力を発揮するためにどの程度の練習を重ねてきたのかは計り知れないほどのものであり私には未知であった。したがって、本大会での選手たちの様子、技術面はもちろんのこと、仲間とのコミュニケーション、試合への姿勢について私の気付きを含め以下に述べる。

1 つ目は、フットワークの重要性である。1 日目、博多の森テニスコートで女子団体 2 回戦を視察した。センターコートでは富士見丘と早稲田実業高校 S1 の対戦。早稲田実業の選手は、体が少々大きく体格の良い選手であった。その体を十分に活かしボールの重みと変え爆発的な球を打つ。それに対して富士見丘の選手もまた全体重をのせたボールを打つ。技術は互角である。しかし、勝者は富士見丘。その差はボールにたどり着く速さにあった。腰を落とし、ネットと同じ高さの姿勢を保ちながら次の展開へボールを運ぶことができる。ボールの落ちる場所を予測し、ボールがバウンドする前にたどり着き打つ準備の姿勢をつくる。振られても必ずボールに食らいつく。片方の手を必死に伸ばし、ラケットの面だけで相手のボールのスピードを利用して返球する。とにかく相手コートの中に 1 球多く入れる。そんながむしゃらさが伝わってきた。どのスポーツにも共通して言えることではあるが、改めて下半身トレーニングの重要性を思い知った。他のコートでの園田学園と山梨学院、野田学園と仁愛女子も見たが、勿論どの試合においても同じ感想を抱いた。

2 つ目は、自分への自信である。2 日目に見た九州文化学園と富士見丘の S2 の試合。「絶対とってやるからな。絶対とってやる！」とポイントの合間に言葉に出す九州文化学園の選手。彼女の言葉の通り守りを主とするプレイスタイルが印象的であった。このとき、一見相手に言っているように聞こえるこの挑発的な言葉。しかし、それだけではないようで、試合中常に集中力を切らさないよう自分に言い聞かせている暗示であるように聞こえた。相手にプレッシャーを与えながらも、自分に根気を持たせて必死にラケットを振る。辛くなっても悔しさを一秒たりとも見せず、冷静に、とにかくこの言葉を信じて、胸に手を当て深呼吸して集中する。コートに入りポイントを一つずつ自分のものへとしていく。よく「自分に勝つ」という言葉を聞く。しかし、彼女の場合はそうではなく自らを仲間に取り込みプレイしているように見えた。「自分を信じる」とはこういうことだ。第 1 セットを落としたものの、その暗示の甲斐あって富士見丘の選手が崩れ始めた。結局、第 3 セットまでもつれこみ、最終的には九州文化学園が勝利。九州文化学園は団体戦では敗退してしまったものの、彼女の試合からは沢山のエネルギーを感じ、観客達の多くは彼女のプレイに引き込まれていた。

3 つ目は、相手への信頼「チームワーク」である。どの試合においても仲間と共に戦う様子が伝わり一体感を感じた。コートでは 1 人。しかし、相手コートに打つ球は監督、選手、応援席、保護者の全員が 1 球であったように感じる。声を出すことはもちろんのこと、「2 本目」と言うと同時に指をピースの形にしてプレーヤーに見せることで視覚的に示し、とにかくプレーヤーの力になろうと必死であった。

監督は、ポイントが決まると立ち上がってガッツポーズ。チェンジコート時の選手とのハイタッチはおきまりの儀式であった。今回驚いたのは、プレーヤーがポイントを先取したときのガッツポーズの対象である。北海道大会や過去に私が見た大会では、相手を威圧するように対戦相手に向けて声を張り上げていた。それが本大会では、ポイントを決めると仲間に向かってガッツポーズをするのである。そうして、次のポイントの前には応援席から聞こえる声を拾い必ず返答する。「はい」は勿論のこと、頷いたり、繰り返し自分に言い聞かせている。ガッツポーズをしながらアイコンタクトをするくらい仲間を信頼している。だからこそ、選手が強気な姿勢でいられる。共に練習した仲間とだからこそわかりあえる言葉があるのだと改めて感じた。

以上3つのポイントに絞って述べたが、未熟故に基本的なことばかりである。しかし、基本的な土台を創ることがまずは大切である。また、技術指導や「勝ち」に執着することも必要であるが、それだけではいけない。教育現場にいる以上今の子ども達の心を育てることが我々の務めである。

共に練習に励み、共に汗を流す。達成や感動、練習への辛さを共に味わうことで教師と生徒、生徒間の信頼関係を育みチームを創り上げる。時には試練を与え考えさせる。また、

1勝することで喜び、大変さからガッツポーズするほど嬉しいと感じる1ポイントの価値の高さを知る。

今回の視察を通して私は、テニスを通して自分への自信、仲間との信頼、継続すること、我慢すること、挑戦することを今の子ども達に伝えたいと改めて感じた。そして、その先に「勝利」という結果を導くことを最終目標とし、今後も生徒と関わっていく決意である。



平成 25 年 4 月 14 日
北海道弟子屈高等学校
林 哲 平

2013 全国選抜高校テニス大会の視察を終えて

まず、このような機会を与えていただいた、北海道高体連テニス専門部に深く感謝いたします。旅程を自由に組むことが可能なおかげで、開会式から決勝まで十二分に満足する視察ができました。より一層、全国の舞台への憧れは強まりました。また、全国の舞台で北海道の代表が戦っている姿を見ることによって、全国大会を身近に感じることができました。『たれば』の話ですが、秋の全道の予選では、本校の女子も大谷室蘭と S3 までもつれることができました。本校の生徒にも、戻ってから決勝戦のビデオはもちろん見せましたが、北海道代表が頑張っている姿も沢山見せました。昨年まで、私はとにかく生徒には『全国』を意識させることはなかなかできませんでしたが、ビデオを見せながらいろいろな話をするによって、全国を感じさせ、全国を意識させることがし易くなりました。

大会の運営についても、来てみなければ分からないことは多いもので、例えば抽選の方式には運の要素が大きいことに驚きました。函館白百合高校が抽選の結果センターコートで一回戦を行っていたり、大谷室蘭高校が前日練習でセンターコートを使用したという話を聞いたりして、羨ましく思いました。巡り合わせがよければ、プロは目指していなくても、部活を頑張っている生徒に、センターコートでボールを打つ機会がある。このことは、生徒にとっては一生の思い出になることなのでしょう。本校の生徒にも体験させてあげたい。そのとき彼らはどんなことを感じるのだろうかと思いを膨らみました。

試合前練習の練習で、特に変わったことをやっているわけではないことも、ある意味収穫です。1面しかない工夫として、2-1のボレー&ストロークを3箇所同時に行っている学校等もありましたが、それは精度が良いからこそその工夫で、メニュー自体は基本的な練習でした。改めて基本が大切なのだと感じました。

最後に、もし全国に出場できたとしたら、大会を主催し、運営してくださっている方々に感謝することはもちろんですが、何よりも感謝したいのは審判団を行っている福岡の高校生でした。もちろん、彼らにもメリットはあるでしょう。毎年必ず1回は全国レベルの大会を間近で見ることができるのは大きな刺激となります。しかし、全国大会で審判することは高校生にとっては非常に大きなプレッシャーでしょう。何度も誤審する姿も見ました。それでも、爽やかに元気よく勤め上げていた福岡の高校生たちの姿を見ることができたことが今回の視察での一番の収穫かもしれません。

